

臨床心理士養成指定大学院の院生が考える 修了後に役立つ学習と体験

目白大学人間学部 田島佐登史

【要約】

本研究は、臨床心理士養成指定大学院の院生が、修了後に役立つと考えている学習や体験について明らかにすることを目的とした。そのため、臨床心理学専攻修士課程に在籍する大学院生58名を対象として、大学および大学院での学習や体験のうち、修了後に役立つと思う学習や体験について質問紙による調査を行い、自由記述式項目の回答についてKJ法による分類を行った。その結果、大学院生が考える修了後に役立つ学習や体験は、《演習や実習の体験》、《ケース検討》、《専門家としての社会性の獲得》、《心理学の知識やスキルの習得》、《日常生活から得られる経験・体験・知識》の5つに分類された。また、大学および大学院を通して習得しなければならないとされている内容のうち、「システムオーガニゼーションの技能」と「研究活動のための知識や技能」は、大学院生が考える修了後に役立つ学習や体験に含まれていなかった。この相違には、心理臨床活動を社会に位置づけていくために必要な臨床心理学の専門活動に関する意識の弱さが関係している可能性が示唆された。

キーワード：臨床心理学，大学院生，役立つ学習・体験，臨床心理士養成

I はじめに

心理的な援助を行う専門職である臨床心理士は、平成19年現在、全国に16,732人いる。この臨床心理士を養成するために指定されている大学院は、平成19年現在、156校の指定大学院、および4校の専門職大学院に上り、臨床心理士資格試験の受験資格は、指定大学院または専門職大学院を修了した者をモデルとしている（日本臨床心理士資格認定協会，2007）。これらの大学院では、臨床心理士として大学院修了後の実践や生涯教育の基礎を作るために必要不可欠な内容（ミニマムエッセンス）を習得し、職場での実情や諸環境の変化に対応できるよう幅広いレパトリーと適応力を持った臨床心理学領域における高度専門職業人の養成を目的としている（大学院における臨床心理学教育のカリキュラム作成ワーキンググループ，2001）。そのため、平成15年度以降、大学院修

士課程でのカリキュラムは、以下のように構成されている。

指定大学院を修了後に臨床心理士資格試験を受験する者は、Table 1に示す大学院のカリキュラムのうち、必修科目5科目16単位、選択必修科目群（A・B・C・D・E）からそれぞれ2単位以上、計26単位以上を取得し、修士論文を提出する必要がある。また、専門職大学院においては、指定大学院に比べて専門的技能の学習がより一層求められており、2年間で実践的学習に関する科目を40単位から50単位以上取得し、修士論文の代わりに臨床実践レポートを提出する必要がある（日本臨床心理士資格認定協会，2007）。

指定大学院および専門職大学院におけるカリキュラムが現在このように構成されているなか、修士課程で習得しなければならない内容に関して、下山（2001a）は、臨床心理学の

Table 1 大学院（修士・前期）で履修するカリキュラム一覧（平成15年度以降適用）

- ①必修科目・単位：臨床心理学特論……4単位
 臨床心理面接特論…4単位
 臨床心理査定演習…4単位
 臨床心理基礎実習…2単位
 臨床心理実習………2単位

- ②選択必修科目群：前項①に定める必修科目以外の臨床心理学またはその近接領域に関連する授業科目（実習を含む）は、当分の間、以下の科目に関連する科目とする。

[A 群]

心理学研究法特論
 心理統計法特論
 臨床心理学研究法特論

[B 群]

人格心理学特論
 発達心理学特論
 学習心理学特論
 認知心理学特論
 比較行動学特論
 教育心理学特論

[C 群]

社会心理学特論
 人間関係学特論
 社会病理学特論
 家族心理学特論
 犯罪心理学特論
 臨床心理関連行政論

[D 群]

精神医学特論
 心身医学特論
 神経生理学特論
 老年心理学特論
 障害者（児）心理学特論
 精神薬理学特論

[E 群]

投影法特論
 心理療法特論
 学校臨床心理学特論
 グループ・アプローチ特論
 臨床心理地域援助特論

日本臨床心理士資格認定協会（2007）より抜粋

専門活動のための知識と技能、実践活動のための知識と技能、研究活動のための知識と技能という3つを主に挙げている。専門活動のための知識と技能とは、社会的役割・機能としての専門性に関するものであり、臨床心理学の活動の基本理念、社会的責任と倫理、関連する法規と行政、他職種との連携、組織の運営などに関する知識と技能である。実践活動のための知識と技能とは、心理学的な臨床実践に関するものであり、アセスメントおよび介入の知識と技能である。研究活動のための知識と技能とは、有効な実践を行うための研究に関するものであり、実践を通しての研究および実践に関する研究の知識と技能である。

これら3つの知識と技能のうち、修士課程の学習で中心となるのは、実践活動の技能学習であるとされている。下山（2001b）によると、実践活動の技能は、全体として3つの次元に分けられる。1つ目の次元は、コミュニケーションを通して事例の当事者あるいは関係者との間に

専門的な関係を形成し、それを媒介として実践活動を遂行する「コミュニケーション」の次元である。このコミュニケーション技能は、4つの段階的構造を形成している。コミュニケーションの次元における第1段階として、援助関係を形成する共感的コミュニケーション技能についてロールプレイなどを通して習得する。次に、第2段階では、アセスメントのためのコミュニケーション技能を学び、第3段階では、個々の事例の問題に介入するための特別なコミュニケーション技能を学ぶことになる。さらに、第4段階として、現場研修を体験することで、社会関係を構築するためのコミュニケーション技能を修得する必要があるとしている。このように、習得すべきコミュニケーション技能は、次第に高次で複雑なものになっていく。また、実践活動の技能における2つ目の次元は、アセスメントによって事例の状況を的確に把握し、それにもとづいて介入の方針や方法を定め、実際に事例に介入し、さらにその結果を受

けてより適切な介入の方針や方法を修正して、適切に実践活動を運営していく「ケースマネジメント」の次元である。さらに、3つ目の次元は、社会システムの中で、臨床心理学の実践活動を社会活動として組織化していく「システムオーガニゼーション」の次元である。

修士課程では、このような実践活動の技能学習が中心とされる一方で、実践活動の技能を学習する前に、臨床心理学の専門活動としての意義を学び、社会性の意識や援助専門職に就くことの自覚を持つ必要があるとされており、専門活動のための知識と技能を習得することの重要性が指摘されている(下山, 2001a)。

さらに、学部段階で学習しておくことが望ましい内容に関して、下山(2001a)は、心理学全般の知識、心理学の研究法、臨床心理学の基礎知識、臨床心理学の基礎技能を挙げている。学部段階の心理学教育を大学院入学の条件とするか否かについては、議論の余地が残っているとしながらも、大学院における臨床心理学の専門教育の前提として、このような学部段階での心理学教育は必須であるとしている。

また、指定大学院および専門職大学院における大学院生の学び方としては、資格取得を志す者自身の学ぶ姿勢や態度をはじめ、実践に結びつけて身につけることが大切である(日本臨床心理士資格認定協会, 2007)。さらに、専門家の訓練は、役に立つものでなければ意味がないとされており(金沢, 1998)、臨床心理士になるための訓練を受ける大学院生は、専門業務を行う上で、役に立つものを学習し、体験する必要があるといえる。

臨床心理士養成のための大学院体制を考えるためには、多くの基本的問題についての緻密な検討が必要であり、特に、どのような専門家をイメージするかということが重要になる(藤原, 2003)。心理臨床家としての専門家像について、藤原(1999)は、最低限の専門的能力ということに焦点化して、教育目標を設定することが考えられるとしている。その上で、大学院生は心理臨床経験とされる専門資質、それと不可分な学位論文の内容と質という本質的課題について、どのような輪郭を描いているのかという疑問を投げかけている。この大学院生にとっ

ての本質的課題は、同時に教育研究指導に携わる大学院教員の教育指導課題であり、大学院システムにおける教育指導目標とその在り方に関する内容と質的な課題そのものであるとし、こうした本質的課題について、正面から考究する取り組みを開始することが必要であるとしている。しかし、日本では、カウンセラー教育について、訓練プログラムを評価したり学生のニーズを調べたりする研究が乏しく、日本のカウンセラー教育の実態についての資料は少ないのが現状である(金沢, 1998)。

そこで本研究では、指定大学院の大学院生が修了後に臨床現場にて心理臨床活動をする上で役に立つと考えている学習や体験の内容を明らかにすることを目的とする。加えて、学部および修士課程を通して習得しなければならないとされている内容と、指定大学院の大学院生が修了後に心理臨床活動をする上で役に立つと考えている学習や体験の内容との相違について検討し、考察を試みる。

II 方法

1. 調査時期：2007年7月。
2. 調査対象：指定大学院であるA大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻修士課程1年生(以下、M1とする)29名・修士課程2年生(以下、M2とする)29名、計58名。
3. 調査方法：M1・M2それぞれの必修講義にて質問紙を集団配布し、期限を設けた上で、後日各自に提出してもらった。
4. 質問紙：筆者が作成した、学部および修士課程に学習・体験した内容のうち、修了後に心理臨床活動をする上で役に立つと考えている学習や体験は何か等について回答してもらうもの。質問項目は、実習経験の有無や修了後に希望する進路、社会人経験などについて、選択式で回答する8項目と、大学院修了後に臨床現場にて実践活動をするとした場合を想定して、以下の事柄において自由記述形式で回答する6項目から主に構成されている。また、選択式項目を作成するにあたり、第4回「臨床心理士の動向ならびに意識調査」報告書(日本臨床心理士会, 2006)を参照した。

- ①大学および大学院の講義で学んだこと・体験したことのうち、将来の臨床活動をする上で役に立つと思うこと
 - ②大学院の内部実習で学んだこと・体験したことのうち、将来の臨床活動をする上で役に立つと思うこと
 - ③大学および大学院の外部実習（無償および有償のボランティア活動を含む）で学んだこと・体験したことのうち、将来の臨床活動をする上で役に立つと思うこと
 - ④大学および大学院の講義や実習で学んだこと・体験したことのうち、将来の臨床活動をする上では役に立たないと思うこと
 - ⑤大学および大学院の講義や実習以外で個人的にしていたことのうち、将来の臨床活動をする上で役に立つと思うこと
 - ⑥残りの大学院時代にしておくと、将来の臨床活動をする上で役に立つと思うこと
- なお、本質問紙の最後に、本質問紙に回答した感想について自由記述形式で回答を求めた。
5. 回収率：78%。質問紙を配布した58名中45名が回答した。人数の内訳は、M1が29名中23名（男性6名・女性17名）、M2が29名中22名（男性6名・女性16名）であった。年齢についてM1・M2を合わせた内訳は、20代37名、30代4名、40代3名、50代1名であった。
 6. 分析方法：自由記述形式の回答をKJ法（川喜田, 1967；川喜田, 1970）の手続きに従い、「単位」として抜き出した。それぞれの「単位」を付箋紙に1つずつ書き出し、模造紙の上に並べ、以下の分析を行った。まず、記述内容の本質が近い「単位」同士をグループとしてまとめ、複数の小グループを編成し、命名した。次に、同様の手続きで小グループ同士をまとめ、いくつかの大グループを編成した。最後に、グループ同士の関係性を矢印などの記号を用いて図式化した上で、文章化した。なお、これらの手続きは心理カウンセリング学科助手1名と筆者の計2名が協議により行った。

Ⅲ 結果

1. 質問項目への回答

①選択式項目

本研究で用いた質問紙における8つの選択式項目に関して、回答の結果を以下に示す。

i) 学部での心理学専攻

学部にて、基礎心理学・臨床心理学・カウンセリング等、心理学を専攻していたと回答したのは、45名中42名（93%）であった。

ii) 内部実習経験

大学院の内部実習にて、面接の担当や陪席の経験があると回答したのは、45名中24名（53%）であった。学年別に見ると、M1で内部実習の経験があると回答したのは23名中2名（9%）であったのに対し、M2は22名中22名（100%）が経験ありと回答した。

iii) 外部実習経験

大学および大学院にてボランティア活動または外部実習（大学および大学院と関係なく自主的にしていたボランティア活動を除く）の経験があると回答したのは、45名中35名（78%）であった。学年別に見ると、M1でボランティア活動または外部実習の経験があると回答したのは23名中14名（61%）であったのに対し、M2は22名中21名（95%）が経験ありと回答した。

iv) 社会人経験

臨床現場での実践活動以外の仕事を含め、社会人として仕事をした経験があると回答したのは、45名中14名（31%）であった。

v) 有償での実践活動経験

実習や無償のボランティア活動を除き、臨床現場での有償による実践活動の経験があると回答したのは、45名中6名（13%）であった。

vi) 臨床心理士資格の取得希望

大学院修了後、臨床心理士資格試験を受験し、資格を取得したいと回答したのは、45名中45名（100%）であった。

vii) 大学院修了後の臨床活動に関する希望

大学院修了後、常勤・非常勤を問わず、仕事として臨床現場にて実践活動をしたいと考えていると回答したのは、45名中42名（93%）であり、残りの3名（7%）は「未定」と回答した。

viii) 大学院修了後に希望する活動領域

大学院修了後、仕事として活動したい領域を

複数回答可にて質問したところ、最も希望の多かった領域は「医療・保健」で、45名中29名(64%)であった。次いで多かったのは「教育」23名(51%)であり、以下、「福祉」21名(47%)、「産業」11名(24%)、「大学・研究所」11名(24%)、「司法・法務・警察」9名(20%)の順で希望が多かった。また、「臨床活動以外」という回答も5名(11%)見られた。

②自由記述式項目

自由記述式項目への回答に関して、それぞれの質問項目における回答を要約したものを「単位」として「」内に示し、単位を分類することにより生成された小グループ名を<>内に示す。なお、グループに含まれる単位数を()内の数字に示す。

i) 講義

大学および大学院の講義で学んだこと・体験したことのうち、将来の臨床活動をする上で役に立つと思うことに関して、最も多かった回答は、「臨床場面を想定したロールプレイで体験したことが、将来同様の場面に遭遇したときに役立つと思う」などの<面接および査定のロールプレイ>(26)についての回答が多かった。次いで、「心理学の基礎的知識や技能」、「精神医学の知識」などの<講義・演習で得られる知識やスキル>(25)についての回答が多かった。また、「教員がふと語った内容が、面接をする上で身にしみることが多い」などの<講義での教員の話>(10)についての回答や、「ケースカンファレンスで、いろいろな意見を聞いたこともよかった」などの<カンファレンス>(10)、「なぜ臨床家になりたいのか、自分自身を振り返ってみるような内容の授業がとても印象深かった」、「倫理について」などの<臨床活動に対する姿勢>(5)についての回答も見られた。

ii) 内部実習

大学院の内部実習で学んだこと・体験したことのうち、将来の臨床活動をする上で役に立つと思うことに関しては、「生のクライアントさんに接することができた」、「経験したこと自体が大変勉強になり、役に立つと思う」など、<内部実習の体験>(12)についての回答が多かった。次いで、「個別スーパーヴァイズにより学んだこと」などの<スーパーヴァイズ(以

下、SVとする)>(9)についての回答が多かった。また、「自分の考え方の幅が広がったり、かかわり方、考え方のくせに気づきつつあったりすること」などの<自分自身についての気づき>(5)、「ケースと向き合ってた考えたこと」などの<ケースについての振り返り>(5)についての回答も見られた。

iii) 外部実習およびボランティア活動

大学および大学院の外部実習(無償および有償のボランティア活動を含む)で学んだこと・体験したことのうち、将来の臨床活動をする上で役に立つと思うことに関しては、「今まで実際に接したことのない対象者と直接話したり、かかわったりできること」など、<外部実習およびボランティア活動の体験>(25)についての回答が最も多かった。次いで、「医療および福祉の現場が大変であることを理解したこと」、「実際に教室に入ること、教師の忙しさや、実際の教室の様子について学んだ」など、<臨床現場についての理解>(12)や、「思春期・青年期の生徒や子どもたちとのかかわり方、はじめの関係づくりを学んだ」など、<援助スキルの獲得>(11)についての回答が多かった。また、「実際の現場で働いている人のものの考え方や、その領域の理解が深まること」などの<臨床現場での専門性の理解>(9)や「連携をとることが大切であること」などの<他職種との連携>(7)、「自分の内面についても冷静に見ること」などの<自分自身についての振り返り>(2)についての回答も見られた。

iv) 役に立たないと思われること

大学および大学院の講義や実習で学んだこと・体験したことのうち、将来の臨床活動をする上では役に立たないと思うことに関して、「特になし」(38)という回答が大半を占めた。一方、少数ではあるが、役に立たないと思うこととして、「基礎心理学」(1)、「統計」(1)という回答が見られた。

v) 講義や実習以外で個人的にしていたこと

大学および大学院の講義や実習以外で個人的にしていたことのうち、将来の臨床活動をする上で役に立つと思うことに関して、最も多かった回答は、「いろいろな人と会うこと」、「同じ臨床家をめざす仲間ができたこと」など、<人

との出会い> (13) についてであった。次いで、「社会人として勤めた経験」, 「アルバイトを通して、心理以外の人とかかわったり、社会を感じられたこと」などの<社会経験> (12) についての回答が多かった。また、「旅行」, 「映画やドラマを見ること」などの<趣味・余暇活動> (11) や「生まれたばかりの子どもの世話をすること」などの<日常生活における人とのかわり> (5), 「学会や研修会に参加して、今まで大学院の講義等で行ってきたことを再確認したり、大学院の中だけでは得られない新たな視点を得られたこと」などの<学会・研修会で得られる知識やスキル> (4) についての回答も見られた。

vi) 残りの大学院時代にやっておくべきこと

残りの大学院時代にしておくと、将来の臨床活動をする上で役に立つと思うことに関して、最も多かった回答は、「学内や学外を問わず、実習を通していろいろ学ぶこと」などの<実習の体験> (24) についてであった。次いで、「本を読んで知識を増やす」などの<書物や論文から得られる知識やスキル> (19) についての回答が多かった。また、「人とのつながりを大切にしておくこと」などの<人とのつながり> (9) や、「講義以外で先生方のお話を聞くこと」などの<講義以外の場で教員の話聞くこと> (6), 「学会に参加する」などの<学会・研修会への参加> (6), 「あらゆる芸能や文化にふれること」などの<文化・芸能にふれること> (6), 「多様な見方ができるようになること」などの<自分自身の変化・成長> (3), 「院生同士で勉強会やディスカッションをする」などの<大学院生同士でのディスカッション> (2) についての回答も見られた。

③感想

本質問紙に回答した感想として、最も多かった回答は、「自分がこれまでに学んだことを改めて振り返ることができた」, 「もう一度自分の進んでいく道について振り返ることができた」などの<振り返りとしてのよい機会> (16) についてであった。一方、次いで多かった回答は、「回答しづらくて難しかった」, 「実際に臨床活動してみないとわからない」などの<回答の難しさ> (14) についてであった。また、「残

りの大学院生活において、より一層の努力が必要だと感じた」, 「役立つと思うことでも、今の時点でできていないことがあるので、行ってみようと思った」など、<大学院時代の有効活用> (6) についての回答も多く見られた。

2. 大学院生が修了後に役立つと考えている学習や体験の内容

指定大学院の大学院生が修了後に臨床現場にて実践活動をする上で役に立つと考えている学習や体験の内容をまとめるため、将来の臨床活動をする上では役に立たないと思うことについての回答を除く、5つの自由記述式項目の回答から生成された全てのグループを集約して、さらに大きなグループを生成した結果をTable 2に示す。なお、生成された大グループ名は、以下<>内に示す。

臨床心理学専攻の修士課程生が、大学院修了後に臨床活動をする上で役立つと思われる学習や体験の内容として挙げたことは、大きく5つのグループに分類された。1つ目の大グループは、<演習や実習の体験>に関するものである。<演習や実習の体験>は、<面接および査定のロールプレイ>, <内部実習の体験>, <外部実習およびボランティア活動の体験>, <実習の体験>という4つの内容を含んでいる。<面接および査定のロールプレイ>は、演習形式の講義における体験に関するものであり、<内部実習の体験>, <外部実習およびボランティア活動の体験>は、実習やボランティア活動における体験に関するものである。<実習の体験>は、修士課程にて実習の体験を多く積むことの必要性に関するものである。

2つ目の大グループは、<ケース検討>に関するものである。<ケース検討>は、<SV>, <カンファレンス>, <ケースについての振り返り>という3つの内容を含んでいる。<SV>は、大学院生が自分自身で担当しているケースについて教員から指導を受けることに関するものであり、<カンファレンス>は、M1の必修講義であるインテークカンファレンスやM2の必修講義であるケースカンファレンスに関するものである。また、<ケースについての振り返り>は、自分自身で担当または陪席しているケースについて振り返って考えたことに関するも

Table 2 大学院生が修了後に臨床現場にて実践活動をする上で役に立つと考えている学習や体験の内容

大グループ	演習や実習の体験				ケース検討		
小グループ	面接および査定 のロールプレイ	内部実習の体験	外部実習および ボランティア活 動の体験	実習の体験	SV	カンファレンス	ケースについて の振り返り
単位	「臨床場面を想定したロールプレイで体験したことが、将来同様の場面に遭遇したときに役立つと思う」	「生のクライアントさんに接することができた」	「今まで実際に接したことがない対象者と直接話したり、かかわったりできること」	「学内や学外を問わず、実習を通していろいろな学ぶこと」	「個別SVにより学んだこと」	「ケースカンファレンスで、いろいろな意見を聞いたこともよかった」	「ケースと向き合っていて考えたこと」
	「疑似体験だが、自分がその場で考え、思い、感じたことは役立っていくと思う」	「経験したこと自体が大変勉強になり、役に立つと思う」	「実際に援助を必要とする方々と接することができ、そのような方々について、少しではあるが理解を深めることができたと思う」	「数多くの臨床例を実際に見ること」	「SVを受けながら実習を進めているので、反省ができること」	「インテークカンファレンスのグループ討論」	「クライアントだけではなく、クライアントの周りの環境や家族まで考慮し、見ていく必要があること」

大グループ	専門家としての社会性の獲得						
小グループ	自分自身についての気づき	自分自身についての振り返り	自分自身の変化・成長	臨床活動に対する姿勢	臨床現場についての理解	臨床現場での専門性の理解	他職種との連携
単位	「自分の考え方の幅が広がったり、かわり方、考え方のくせに気づきつつあったりすること」	「自分の内面についても冷静に見ること」	「多様な見方ができるようになること」	「なぜ臨床家になりたいのか、自身自身を振り返ってみるような内容の授業がとても印象深かった」	「医療および福祉の現場が大変であることを理解したこと」	「実際の現場で働いている人のもの考え方や、その領域の理解が深まること」	「連携を取ることが大切であること」
	「自分自身についていろいろ考えたこと」	「自己内省について」	「いろいろな人とかわれる自分になること」	「倫理について」	「実際に教室に入ること、教師の忙しさや、実際の教室の様子について学んだ」	「現場や教育の場での心理職の雰囲気」	「チームで協力すること」

大グループ	心理学の知識やスキルの習得						
小グループ	講義・演習で得られる知識やスキル	講義での教員の話	学会・研修会で得られる知識やスキル	学会・研修会への参加	書物や論文から得られる知識やスキル	大学院生同士のディスカッション	援助スキルの獲得
単位	「心理学の基礎的知識や技能」	「教員がふと語った内容が、面接をする上で身にしみることが多い」	「学会や研修会に参加して、今まで大学院の講義等で行ってきたことを再確認したり、大学院の中だけでは得られない新たな視点を得られたこと」	「学会に参加する」	「本を読んで知識を増やす」	「院生同士で勉強会やディスカッションをする」	「思春期・青年期の生徒や子どもたちとのかかわり方、はじめの関わり方を学んだ」
	「精神医学の知識」	「臨床現場で働いている教員の生の話を聞くことは、将来役に立つと思う」	「臨床経験の豊富な先生の講演会」	「研修会に参加する」	「論文や専門書の購読」	「複数人でのディスカッションを通して、知識を深めるくせをつける」	「実際に多くの子どもたち、そしてその保護者とかかわりの中で、相手の様子を見つつ、柔軟にかかわっていかなくてはいけないということを体感した」

大グループ	日常生活から得られる経験・体験・知識						
小グループ	日常生活における人とかかわり	人との出会い	人とのつながり	講義以外の場で教員の話や話を聞くこと	社会経験	趣味・余暇活動	文化・芸能にふれること
単位	「生まれたばかりの子どもの世話をする」	「いろいろな人と出会うこと」	「人とのつながりを大切にしておくこと」	「講義以外で先生方のお話を聞くこと」	「社会人として勤めた経験」	「旅行」	「あらゆる芸能や文化にふれること」
	「障害のある方と接していたこと」	「同じ臨床家を目指す仲間ができたこと」	「人とつながっていくこと」	「指導教授以外の先生ともたくさん話をし、聞きながら吸収し、実習などの場面に活かせるようにすること」	「アルバイトを通して、心理以外の人とかかわったり、社会を感じられたこと」	「映画やドラマを見ること」	「芸術鑑賞など、日本文化を体験したい」

のである。

3つ目の大グループは、《専門家としての社会性の獲得》に関するものである。《専門家としての社会性の獲得》は、〈自分自身についての気づき〉、〈自分自身についての振り返り〉、〈自分自身の変化・成長〉、〈臨床活動に対する姿勢〉、〈臨床現場についての理解〉、〈臨床現場での専門性の理解〉、〈他職種との連携〉という7つの内容を含んでいる。〈自分自身についての気づき〉は、自分自身の対人関係の取り方などについての気づきに関するものであり、〈自分自身についての振り返り〉は、自分の内面についての振り返りに関するものである。また、〈自分自身の変化・成長〉は、自分自身のさまざまな変化・成長に関するものである。〈臨床活動に対する姿勢〉は、自分自身が臨床現場にて実践活動を行っていく上で大切な姿勢や態度に関するものである。さらに、〈臨床現場についての理解〉は、教育、医療、福祉など、臨床現場における状況についての理解に関するものであり、〈臨床現場での専門性の理解〉は、臨床現場で実践活動を行う際に必要な心理援助職としての専門性の理解に関するものである。そして、〈他職種との連携〉は、同じ臨床現場内で活動している他職種との連携の大切さに関するものである。

4つ目の大グループは、《心理学の知識やスキルの習得》に関するものである。《心理学の知識やスキルの習得》は、〈講義・演習で得られる知識やスキル〉、〈講義での教員の話〉、〈学会・研修会で得られる知識やスキル〉、〈学会・研修会への参加〉、〈書物や論文から得られる知識やスキル〉、〈大学院生同士のディスカッション〉、〈援助スキルの獲得〉という7つの内容を含んでいる。〈講義・演習で得られる知識やスキル〉は、学部や修士課程の講義・演習で得られる心理学の知識やスキルに関するものであり、〈講義での教員の話〉は、講義における教員の実践活動経験にもとづいた話に関するものである。〈学会・研修会で得られる知識やスキル〉は、学会や研修会などに参加することにより得られる知識やスキルに関するものであり、〈学会・研修会への参加〉は、修士課程にて多くの学会・研修会に参加する必要

性に関するものである。また、〈書物や論文から得られる知識やスキル〉は、本や論文などから得られる心理学の知識やスキルに関するものである。さらに、〈大学院生同士のディスカッション〉は、大学院生が自主的に行う勉強会や話し合いに関するものである。そして、〈援助スキルの獲得〉は、臨床現場にて実践活動をする際に活用できるスキルの獲得に関するものである。

5つ目の大グループは、《日常生活から得られる経験・体験・知識》に関するものである。《日常生活から得られる経験・体験・知識》は、〈日常生活における人とのかかわり〉、〈人との出会い〉、〈人とのつながり〉、〈講義以外の場で教員の話聞くこと〉、〈社会経験〉、〈趣味・余暇活動〉、〈文化・芸能にふれること〉という7つの内容を含んでいる。〈日常生活における人とのかかわり〉は、日常生活で出会う人とのかかわりに関するものであり、〈人との出会い〉は、主に同じ心理臨床家を目指す仲間との出会いやつながりに関するものである。また、〈人とのつながり〉は、人とのつながりの大切さに関するものである。〈講義以外の場で教員の話聞くこと〉は、講義以外の場における教員からの話に関するものであり、〈社会経験〉は、社会人として勤めた経験に関するものである。さらに、〈趣味・余暇活動〉は、日常生活での趣味や余暇活動に関するものであり、〈文化・芸能にふれること〉は、日常生活にて文化・芸能にふれる大切さに関するものである。

このように分類、生成された5つの大グループ間の関係性について、図式化したものを Figure 1 に示した。

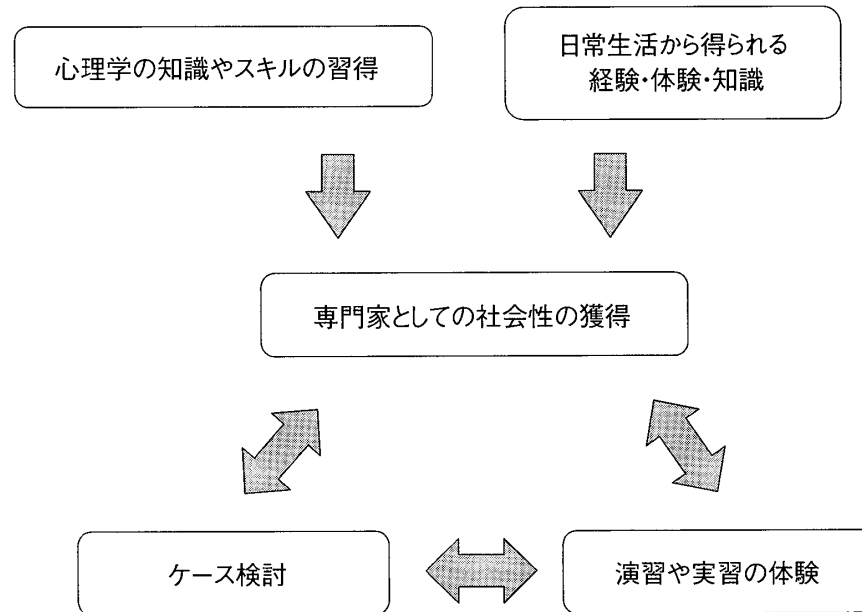


Figure1 大学院生が修了後に役立つと考えている学習や体験の内容における関係性

IV 考察

1. 大学院生が修了後に役立つと考えている学習や体験の内容における関係性

指定大学院の大学院生が修了後に臨床現場にて実践活動をする上で役に立つと考えている学習や体験の内容は、Figure 1のような関係性にあると考えられた。

臨床心理学専攻の大学院生は、学部および修士課程にて、面接や査定のロールプレイについての演習や、内部・外部実習を通して、さまざまな体験をする。串崎（2005）が、インテーク面接に陪席することのメリットについて、悩みや苦しみを語るクライアントの生の姿に触れられることを挙げているように、大学院生は、実際の面接に陪席するなかで、特に貴重な体験をすると思われる。このような《演習や実習の体験》を積むことは、自分自身について振り返る機会を得たり、援助スキルの獲得をしたりするなど、《専門家としての社会性の獲得》につながると考えられる。特に、外部での実習を経験することにより、臨床現場における厳しい状況や心理援助職の専門性についての理解につながり、他職種との連携の重要性を認識することができると思われる。このようにして、大学院生は、《専門家としての社会性の獲得》を少しずつしていく中で、《演習や実習の体験》をより

充実した深いものとすることができると考えられる。

また、《演習や実習の体験》をした後に、大学院生はSVを受けたり、インテークカンファレンスやケースカンファレンスにて、他の大学院生や教員から意見および助言をもらったりする。このような機会を通して、大学院生は担当または陪席しているケースに関して、自分自身で何度も振り返り、検討を重ねていく。このようにして行う《演習や実習の体験》後の《ケース検討》により、担当しているケースについての理解をより深めたり、広い視点を持って実習に臨めたりするようになると考えられる。大学院生のトレーニングに関して、濱野（2005）が、実際にクライアントと出会い、SVを受けながら、実際的に援助の仕方を学ぶことは必要不可欠の体験であるとしているように、演習および実習を体験するごとにケース検討を行うことによって、演習および実習の体験はより充実したものとなる。

さらに、《ケース検討》を通して、《専門家としての社会性の獲得》をすることも考えられる。大学院生は、SVやカンファレンスを通して、自分自身についての気づきや援助スキルを得られたり、臨床活動に対する姿勢を学んだりすると思われる。また、《専門家としての社会

性の獲得」をすることにより、SVやカンファレンスを通して、自分自身でケースについてより深く振り返ることができるようになったり、自分のケースについて相手に伝える際の焦点づけが変化したりすると考えられる。

したがって、「演習や実習の体験」、「ケース検討」、「専門家としての社会性の獲得」は、相互に作用し合っていることが示唆される。

加えて、「専門家としての社会性の獲得」を促すものとして、「心理学の知識やスキルの習得」および「日常生活から得られる経験・体験・知識」が影響していると考えられる。「演習や実習の体験」および「ケース検討」を通して獲得する専門家としての社会性について、学部および修士課程での講義・演習や、学会および研修会で得られた心理学の知識やスキルと照らし合わせて考えることにより、社会性が促進されると思われる。また、「日常生活から得られる経験・体験・知識」を通して、自分自身についての気づきを得たり、臨床活動に対する姿勢を学んだりすることも考えられる。この点に関して、金沢(1999)は、学生が芸術に触れたり、グループ体験や人間的な経験を通じてアートの部分を涵養することと、心理学実験やリサーチの訓練によって科学的思考を養うことは、両方とも必要であるとしている。また、串崎(2005)は、信頼できる仲間とのあたたかい関係は、心理療法を学ぶ際の豊かな土壌になるとしている。よって、専門家としての社会性を獲得するにあたっては、講義や学会などで得られる心理学の知識やスキルだけでなく、日常生活から得られる経験や体験なども重要であると考えられる。

2. 習得すべき内容と、大学院生が修了後に役立つと考えている内容との相違

下山(2001a)による学部および修士課程を通して習得しなければならないとされている内容と、本研究により得られた、指定大学院の大学院生が修了後に臨床現場にて実践活動をする上で役に立つと考えている学習や体験の内容との比較を行い、考察を試みる。

大学院生が実践活動をする上で役に立つと考えている学習や体験の内容のうち、学部段階で学習しておくことが望ましいとされている内容

に該当すると考えられるのは、心理学全般の知識、臨床心理学の基礎知識、臨床心理学の基礎技能である。

心理学全般の知識および臨床心理学の基礎知識に該当すると考えられるのは、〈講義・演習で得られる知識やスキル〉、〈講義での教員の話〉、〈書物や論文から得られる知識やスキル〉の3つである。学部の講義を受講すること、講義にて教員の実践活動経験にもとづいた話を聞くこと、書物や論文を読むことにより、学部段階において、幅広い心理学の知識や、心理療法の諸理論、異常心理学の知識などを学習することができると思われる。

臨床心理学の基礎技能に該当すると考えられるのは、〈日常生活における人とのかかわり〉、〈人との出会い〉、〈人とのつながり〉、〈講義以外の場で教員の話聞くこと〉、〈社会経験〉の5つである。人との出会いやつながりを大切にし、日常生活における人とのかかわりを通して、人間関係を構成する技能や、人間関係のなかで自己の心の動きをモニタリングする技能を身につけられると思われる。また、社会経験を積むことにより、臨床心理学の専門活動を行う上で必要な社会性の基礎を育むことにつながると考えられる。

一方、学部段階で学習しておくことが望ましい内容の1つである心理学の研究法に該当すると考えられるものは、大学院生が臨床現場にて実践活動をする上で役に立つと考えている学習や体験の内容には含まれていない。

また、大学院生が実践活動をする上で役に立つと考えている学習や体験の内容のうち、修士課程で学習しなければならないとされている内容に該当すると考えられるものは、専門活動のための知識と技能、実践活動のための知識と技能である。

専門活動のための知識と技能に該当すると考えられるのは、〈臨床活動に対する姿勢〉、〈臨床現場についての理解〉、〈臨床現場での専門性の理解〉、〈他職種との連携〉の4つである。臨床現場での体験を通して、大学院生は、専門活動のための知識と技能である社会の中での臨床心理士の立場・役割、関連各機関の機能・役割、他職種との協働の仕方について学ぶ

ことができると思われる。また、大学院での講義・演習を通して、専門活動のための知識と技能に含まれる職業倫理について学習することができると考えられる。ただし、専門活動のための知識と技能のうち、説明責任の重要性に該当すると考えられるものは、大学院生が役に立つと考えている学習や体験の内容には含まれていない。

実践活動のための知識と技能に該当すると考えられるのは、〈面接および査定のロールプレイ〉、〈内部実習の体験〉、〈外部実習およびボランティア活動の体験〉、〈SV〉、〈カンファレンス〉、〈ケースについての振り返り〉の6つである。さらに、これらを実践活動の技能における3つの次元に分けて考えると、コミュニケーションの技能とケースマネジメントの技能に該当すると考えられる。

コミュニケーションの技能に関しては、ロールプレイを通して、第1段階の共感的コミュニケーションについて学ぶことができると思われる。さらに、内部実習の体験や外部実習の体験を通して、第2段階であるアセスメントのためのコミュニケーション技能や、第3段階である介入のためのコミュニケーション技能、第4段階である社会関係を構築するためのコミュニケーション技能を学ぶことができると考えられる。

ケースマネジメントの技能に関しては、SVやカンファレンスを通して、ケースについて振り返りを行うことで、アセスメントによって事例の状況を的確に把握すること、それに基づいて介入の方針や方法を定めること、実際に事例に介入すること、さらに介入の結果を受けてより適切な介入の方針や方法を修正して、適切に実践を運営していくことについての技能を学ぶことができると考えられる。

一方で、実践活動のための知識と技能のうち、システムオーガニゼーションの技能に該当すると考えられるものは、大学院生が実践活動をする上で役に立つと考えている学習や体験の内容には含まれていない。

加えて、修士課程で習得しなければならない内容の1つである研究活動のための知識と技能に該当すると考えられるものは、大学院生が実践活動をする上で役に立つと考えている学習や

体験の内容には含まれていない。

このように、学部および修士課程を通して習得しなければならないとされている内容と、大学院生が修了後に臨床現場にて実践活動をする上で役に立つと考えている学習や体験の内容との相違は、システムオーガニゼーションの技能や、研究法および研究活動のための知識や技能においてみられた。システムオーガニゼーションの技能を習得するためには、臨床心理士の社会的責任および倫理、他の専門領域との連携の方法、各職域における活動の特徴等といった臨床心理学の専門活動についての学習をしておくことが前提とされる(下山, 2001b)。また、研究活動の学習は、データに基づいて実践活動を見直す態度を学習するとともに、実践活動の効果を実証的に示し、社会に対して説明責任を果たす技能を身につけることが目的とされており(下山, 2001a)、研究活動が、専門活動のための知識と技能に含まれる説明責任の観点から重要であることを認識している必要があるといえる。よって、これらの相違には、大学院生における専門活動についての学習の不十分さが関係している可能性が示唆される。

3. 本質問紙への回答を通しての振り返りの意義

本質問紙に回答した感想として、〈振り返りとしてのよい機会〉であったという回答が多く挙げられた一方で、〈回答の難しさ〉についても多く挙げられた。「学んでいることは多くあるが、言葉にする難しさを感じた」という感想にあるように、大学および大学院にて学んだことを振り返り、将来の臨床活動をする上で何が役に立つかについて言語化することは、まだ実際の臨床活動を行った経験の少ない大学院生にとって、容易なことではないと思われる。しかし、本質問紙に回答することを通して、「文章で書くと、整理しながら考えることができた」という感想のように、今まで大学および大学院で学習したことや体験したことについて振り返り、整理することで、修了後の臨床現場における実践活動と現在の自分自身の状況を照らし合わせて考えることができる可能性も示唆される。

この点に関して、Corey & Corey (1998 下山

監訳 2004) は、自分は心理援助職に向いているのかという援助専門職を目指す者であれば誰もが持つ疑問に答えるためには、自分自身を正直に見つめ直すことが必要であると述べており、援助専門職になるにあたって自分自身を振り返ることの重要性を強調している。また、Zaro, Barach, Nedelman, & Dreiblatt (1977 森野・倉光訳 1987) は、心理療法の訓練を受け始める際にもっていた期待は、後に訓練生が経験する困難や個人的な苦悩と関連が深いとしており、どのような期待をもって訓練に入ったかを調べておくことは訓練の準備として役に立つと指摘している。よって、大学院に入った契機や、学部や大学院での学習や体験の内容を振り返ることは、臨床心理士を目指す大学院生にとって、有意義なものであると考えられる。

さらに、感想として、「残りの大学院生活において、より一層の努力が必要だと感じた」というものが挙げられているように、大学院生にとって、大学院での残りの在籍期間を有効に活用し、より充実したものにしようとする意識につながる可能性も示唆される。

したがって、本質問紙に回答することは、大学院生にとって、修了後に役立つと考えている学習や体験を、希望する実践活動の領域と結びつけて考えたり、大学院の期間をより充実させたいと改めて感じたりする機会になるという点で、意義のある可能性が示唆される。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、A大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻に在籍している大学院生のみを対象として調査を行ったため、本調査から得られた結果は何らかの偏りが内在していると考えられる。今後は、A大学院以外の指定大学院および専門職大学院の大学院生を対象として、修了後に臨床現場にて実践活動をする上で役に立つと考える学習や体験の内容を明らかにすることが、課題のひとつとして挙げられる。

また、大学院修士課程にて習得すべき必要不可欠な内容についてさらに検討していくため、大学院生が修了後に実践活動を行う臨床現場にいる臨床心理士や他職種、および大学院を修了してから数年しか経過していない初心臨床家を

対象として、大学院修士課程でのミニマムエッセンスを調査する必要があると思われる。

謝辞

本研究の調査にご協力いただきましたA大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻の大学院生の方々に、心より御礼申し上げます。

本論文作成にあたり、貴重なご意見やご助言をくださった目白大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻黒沢幸子教授、東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野森俊夫助教、目白大学人間学部心理カウンセリング学科星美和子助手に深く感謝いたします。

【引用・参考文献】

- Corey, M. S. & Corey, G. (1998). *Becoming a helper*. 3rd Ed. Brooks/Cole Publishing Company (コーリイ, M. S.・コーリイ, G. 下山晴彦 (監訳) 堀越勝・堀越あゆみ (訳) (2004). 心理援助の専門職になるために——臨床心理士・カウンセラー・PSW を目指す人の基本テキスト——金剛出版)
- 大学院における臨床心理学教育のカリキュラム作成ワーキンググループ (2001). 臨床心理士養成カリキュラムの科目構成 (案) 財団法人日本臨床心理士資格認定協会 (編) 臨床心理士報, **13 特別号**, 76-80.
- 藤原勝紀 (1999). 心理臨床家の養成をめぐる課題——心理臨床指導に関する実践研究と臨床実践指導者の養成——臨床教育実践研究センター紀要, **3**, 77-86.
- 藤原勝紀 (2003). 臨床心理士養成大学院の教育研究体制と臨床実践指導研究分野の新しい展開——京都大学型総合大学院モデルの提案——臨床教育実践研究センター紀要, **7**, 27-36.
- 濱野清志 (2005). 心理臨床センターにおける訓練のあり方 鐘 幹八郎 (監修) 川畑直人 (編) 心理臨床家アイデンティティの育成 創元社 pp.17-24.
- 金沢吉展 (1998). カウンセラー——専門家としての条件—— 誠信書房
- 川喜田二郎 (1967). 発想法——創造性開発のために—— 中央公論社
- 川喜田二郎 (1970). 続・発想法——KJ法の展開と応用—— 中央公論社
- 串崎幸代 (2005). ケースをもつまでの臨床教育

- 鑑 幹八郎 (監修)・川畑直人 (編) 心理臨床家
アイデンティティの育成 創元社 pp.39-48.
- 日本臨床心理士会 (2006). 第4回「臨床心理士の
動向ならびに意識調査」報告書 日本臨床心理士
会
- 日本臨床心理士資格認定協会 (2007). 新・臨床心
理士になるために [平成19年版] 誠信書房
- 下山晴彦 (2001a). 臨床心理士養成カリキュラム
下山晴彦・丹野義彦 (編) 講座臨床心理学 I 臨
床心理学とは何か 東京大学出版会 pp.191
-209.
- 下山晴彦 (2001b). 臨床心理学の専門性と教育 下
山晴彦・丹野義彦 (編) 講座臨床心理学 I 臨床
心理学とは何か 東京大学出版会 pp.73-95.
- Zaro, J. S., Barach, R., Nedelman, D. J., & Dreibratt,
I. S. (1977). A guide for beginning
Psychotherapists Cambridge University Press
(ザロ, J. S.・バラック, R.・ネーデルマン, D.
J.・ドレイブラット, I. S. 森野礼一・倉光修 (訳)
(1987). 心理療法入門——初心者のためのガイド
——誠信書房)

Useful Learning and the Experience after the Graduate School Completion for Students in Master's Program of Clinical Psychology

Satoshi Tajima Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2008 vol.4

[Abstract]

The purpose of this paper is to clarify learning and the experience that graduate students in master's program of clinical psychology think to be useful after the graduate school completion. For 58 graduate students in master's program of clinical psychology, I carried out investigation with the questionnaire about learning/experience in the university and graduate school to be useful after the graduate school completion. I classified the answers of the free description-type question items by KJ-method. As a result, learning/experience that graduate students think to be useful after the graduate school completion were classified into 5 groups: "experiences of practice and exercises", "consideration of case", "getting social skills as the expert", "acquisition of psychological knowledge and skills", and "experience and knowledge to be provided from daily life". In addition, among what the students must learn through the university and graduate school, "skills of the system organization" and "knowledge and skills for research activities" were not included in learning/experience in the university and graduate school to be useful after the graduate school completion. It was suggested that this difference was related to a weakness of the consciousness about the specialized activities of clinical psychology that is necessary to place clinical psychology in the society.

keywords : clinical psychology, graduate students, useful learning/experience, cultivation of clinical psychologist